

人が「ひと」として本物であること : Schmidの論文から学ぶ?

| | |
|-----|---|
| 著者 | 並木 崇浩, 白? 愛里, 山根 倫也, 小野 真由子 |
| 雑誌名 | 関西大学心理臨床センター紀要 |
| 巻 | 12 |
| ページ | 71-80 |
| 発行年 | 2021-03-15 |
| URL | http://doi.org/10.32286/00022933 |

人が「ひと」として本物であること

—Schmid の論文から学ぶI—

関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 並木 崇浩
関西大学心理臨床センター 白崎 愛里
関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 山根 倫也
関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 小野真由子

要約

本稿はパーソン・センタード・アプローチにおける本物であること (authenticity) について、対話や関係の観点から論じた、Schmid (2001a) の “Authenticity: the Person as His or Her Own Author. Dialogical and Ethical Perspectives on Therapy as an Encounter Relationship. And Beyond.” を紹介しつつ、彼の論考について考察するものである。近年、出会いや対話といったより相互的な視点が再評価されており、その動向を捉えるうえでも、Schmid の論考は意義があるといえる。Schmid (2001a) は本物であることを常に関係の文脈で捉えており、人が「ひと」となるには、本人が他者との関係、出会いの中で本物である必要があると論じる。そして、このパーソン・センタードな出会いやそれに至るプロセスを Schmid は他者性やプレゼンス、我-汝の概念を用いながら描写している。特に、彼はパーソン・センタードな出会いにおける弁証法のプロセス、つまり「どちらも」の視点、さらには「私たちの視点 We-perspective」から「ひと」を捉えること、グループ・アプローチの重要性を説いている。最後に、社会的次元や政治的次元から、パーソン・センタード・アプローチの在り方や「ひと」を捉え直している。以上の論文に対する考察として、筆者は Schmid の立場の特徴、パーソン・センタード・アプローチの射程範囲、そして本論をどのように読むことで私たちが本物であることを学べるかについて論じた。

キーワード：パーソン・センタード・アプローチ、純粋性、出会い、他者性、グループ

1. はじめに

パーソン・センタード・アプローチ (以下、PCA) において、出会い (encounter) の理論的、実践的意義を再評価する動きが高まっている。PCA の特徴はこれまで、主にセラピスト (以下、Th) の態度条件から論じられることが多かった。しかし近年、クライアント (以下、Cl) と Th の相互性や対話という関係性の観点

から PCA を捉える動きが見られる (Mearns & Cooper 2017, Murphy, Cramer & Joseph 2012, Schmid 1998a)。PCA の国際学会誌である Person-Centered & Experiential Psychotherapies でも、2019 年に出会いをテーマにした特集が企画され (Proctor, Fuchs & Przyborski 2019)、様々な領域から出会いについて論じられている。

このような PCA の潮流を捉えるうえでも、出

会いや関係性に関する概念を理解しておくことは重要である。そこで、本稿ではパーソン・センタードの対話や関係性に関する文献として、Schmid (2001a) の“Authenticity: the Person as His or Her Own Author. Dialogical and Ethical Perspectives on Therapy as an Encounter Relationship. And Beyond.”を紹介しつつ、彼の論考について考察する。また、本稿はRogers' Therapeutic Conditions: Evolution, Theory & Practice というシリーズの各巻に掲載されている Schmid の論文をそれぞれ要約、考察する試みの一つであり、他の巻に掲載されている論文は小野、斧原、並木ら(印刷中)、白崎、並木、小野ら(印刷中)、山根、並木、白崎ら(印刷中)がそれぞれ担当している。また、要約に際し、紙面の都合上、Rogersに関する文献史に関する部分、神学や哲学との関連性に関する部分は大きく省いている。しかし、Schmidは一貫して自身の考えは、Rogersの文献から読み取ることができ、Rogersの初期からの関心と関係している、と主張しているということを先に述べておく。

2. Schmid (2001a) “Authenticity: the Person as His or Her Own Author. Dialogical and Ethical Perspectives on Therapy as an Encounter Relationship. And Beyond.”の要約

ひととしてのその人：「パーソン」・センタード固有の視点

「パーソン・センタード」という用語は、人間学が「パーソン」・センタード・アプローチの中心であることを示すために、意識的かつ意図的に導入されたのは明白である。「ひと」という用語は人間に関する特定の捉え方を意味し、西洋神学、西洋哲学の中で発展し作り上げられてきた(Schmid 1998a, 1998b)。「ひと」とは、人間の実存に関する二つの棄却することができない次元を結びつけている。つまり、ひとであるという実体的、個別的側面と、ひとになるとい

う関係的、または対話的側面である。人間を理解する二つの方法は、反対であり矛盾すらするが、自律性と相互関係、自立性と相互依存、自己信頼と献身、自治と連帯、これらの対立こそが、そのひとらしさを形作るのである。また、パーソン・センタードにおける「ひと」とは、「実現傾向」と「十分に機能するひと」、「関係」と「出会い」の二つの次元によって特徴づけられる。さらに、この人間学的立場は現象学と人格主義的(または対話的、出会いの)哲学によって形成され、パーソン・センタード的理解、考え、そして行動の特色ともいえる。

本質主義的アプローチがひととはなにかを強調するならば、関係主義的アプローチはいかにそのひとがひとになったかに重点を置く。生まれたときから、人間は個別的なひとであり、また他者とのパーソナルなコミュニティに関わっている。他者との関係を通してのみ、ひとは自身のそのひとらしさ(人格)が発展し実現していく。よって、ひとの本質的要素とは、自立性と依存、主権と義務、そして自律性と連帯の両方なのである。「どちらか」ではなく、「どちらも」という解釈の弁証法の中でのみ、ひとの秘められた部分へと繋がるができる。以上より、パーソン・センタードの人間学における弁証法的基本原理は、実現傾向、つまり相互関係の中に組み込まれた個人の力、そしてひとの社会的性質である。これらどちらの要素も、個人化、真に「ひとになる」ことを理解する上での基礎となる(Rogers, 1961)。

本物であること：開放性と透明性

ひとであること、そしてひとになることを示す用語として、本質的側面を表す「純粋性」と、関係的次元を表す「一致」の二つがある。一致とは、何かまたは誰かと、他の何かまたは誰かとの一致について話す際、私たちがそれを理解できる以前に、常に関係性が存在していなければならないことを示している。純粋なひとは自分であることを深く生きている、つまり彼らの

瞬間瞬間に変わり続ける有機的変化は厳密に、つまり純粋に、彼ら自身に関する気づきや意識によって表現される。自己実現傾向と実現傾向は合致する。気づきと有機体、自己とひととが一致しているのである。個人の本質的な側面を示すこの純粋性の内的な次元は、自身に開かれていること、と呼べるだろう。

純粋性は、他者への開放性と一致する。他者、その関係的次元は、経験と他者へのコミュニケーションとの合致を意味する透明性という用語によって特徴づけられる。ひとは、その瞬間に自身が経験した方法で自身を見せるのであり、意識的、また無意識的に仮面を付けたり、違ったふりをするのではない。自身の経験を信じることと信頼されること、自分を自身にも他者にとっても信用できる存在と捉えることは、密接に関わり合っている。経験とその表現やコミュニケーションは一致している。

本物であるとは、信頼できる、偽りでなく本物であると、確信または受容する権利を持つことを意味する。ギリシャ語で ‘auth-éntes’ (‘autós’ = 自身) とは当事者、創始者を意味し、また自身の手でなにかを成す人を指すともいえる (Duden, 1963)。この語源学的観点から、真のひとは、自身の創始者である人間といえよう。つまり自身の経験の象徴や自身のコミュニケーションの始まりの存在がそのひと自身なのである。象徴化または言語化された経験は二次的ではなく一次的、直接的なものである。よって真のひとは、そのひと自身と、そして他者との関係性の中で自身の当事者 (author) なのだ。

対話：相互的発露と心からの受理

弁証法のプロセスの中で、本物であることと出会いは互いに促進し合う。よって本物であることとは、お互いについて話をするのではなくお互いとコミュニケーションをする、対話へと臨むための基礎といえる。対話は本物であるひと同士の中でのみ起こりうるのだ。対話の中で、

ひとは別のひとを「他者」として真に見る必要がある。対話の哲学の考え (人は理解し得ないが共感できる) における「他者」は、Rogers が「出会い」と呼んだ関係の仕方を理解する上で非常に重要である。コミュニケーションの中で他者は、自分と似た誰か、「もう一人の私」としてではなく、全くの別人、絶対的に違うひととして捉えられる。その自分と異なるひとに、私はエニグマ (不可解な人) として出会い、他者の根源的な他者性に気づき、そのひとの開かれるプロセスを、導くのではなく促進する。私がある人 (他者) を理解するのではなく、その人が自身に開かれ、自身を露わにする存在なのである。認識論の観点から、それは日常のコミュニケーションとは真逆の形式の中で起こるといえる。つまり、私たちは他者を、自身と彼らとの類似性で理解するのでも、他者を評価や評定をするのでも、彼らがいかなる人なのかを判断するのでもない。むしろ私たちはその他者を、彼らが示す、経験する、コミュニケートする、そして露わにする、あらゆるものに対して開かれていることで理解しようと試みるのである。その方向性は他者から私に向かうのであり、私から他者に向かうのではない。

このような関わり方が、まさに「中へー対抗する (en-counter)」と呼ばれるものである。なぜなら、他者もまた私と「相対し」、私に挑戦し、私が自分の考えを、さらには彼らを受容し承認することで私自身を変えるよう要求し、私に応答すること、私の責任 (応答可能性 response-ability) を求めるのである。一般的にも、PCA における意味でも、この「出会い」という言葉がインフレーションを起こしているため、出会いに必須な要素として人間がその人をより深みへと動かす現実と直面することが必要であると、ここで言及しなければならない。出会いとは、理想的、主観的な理解を前提としたものとも、発展や達成がそれ自体のみから生じるという理解とも、本質的に異なる経験である。それは異質であり、他者であり、もう一つの現実

であり、もう一人のひとであり、それは私の現実と出会い、私と出会うのである。これこそが出会いの実存的次元と不可避性を構成しているのである。

Martin Buber (1923, 1948, 1951) にとって、ひとであるとは、自身とコミュニケーションすることを意味する。出会いや対話という事象は、そのひとを構成しているのである。「全ての真の生とは出会いである」(Buber, 1923, p. 18)。つまり、我 (the I) とは、実際には他者との出会いの中でのみ構成されているのである。「我は汝を介して我と成り、我は汝と言う (同上)」。Buber は出会いを、その人が他者にとって「存在 (presence) になる」事象として表現している。彼によると、出会いとは本物であることによって特徴づけられ、外見だけの「見かけの侵入」ではなく、「在り方の本物さ」である。これは、真の発露には心からの受理が必要であるという事実を示している。パーソナルな受け入れる態度無しには、発露は起こり得ない。防衛、偽装、演技、専門家の仮面は、本物であることを求めるひとにとって、認識論的、実践的に重要な瞬間、例えばセラピーでのCIの可能性にとって障害となる。

本物であること：多元的世界における弁証法のプロセス

一致を考えることは差異を意味する。人は多様性を経験し熟慮しなければ、一致していることを内省できない。もし違いがなければ、プロセスも進展もないだろう。しかし、その違いは私と別のひととの間のことだけではない。我と汝との出会いがBuber哲学の主要な点である一方、Emmanuel Levinas (1961, 1974, 1983) は、出会いの哲学において、「他者」との関係から「他者ら」との関係へと発展させた。Levinasは、我-汝関係の(比較的)閉ざされた関係が未だ、内包された概念である、と指摘する。彼の考えによると、(現象学的、発達心理学的、そして倫理的に)常に他者が最初に来るのだから、関係

性を「汝-我関係」とした方がより理解できるとされる。

ここで、誰を信じればよいのかという疑問が浮かび上がる。例えば、私の友人の友人は、私の友人にとっては信頼できる存在なのだろうが、私にとってはそうではない。人々はそれぞれ、多くの他者がいる世界を生き延びて、よって彼らは選択し、判断しなければならない。人々は「単なる関わり (mere relating)」という主観主義的な立場から離れ、客観主義的態度を取る必要がある。あなたがもし、ある人が別の(自分とその人とは異なる)関係性の文脈の中にあると考え、自分とその人との関係性がもはや自明ではないとすると、あなたは自身を主観対主観の関係に限定することはできない。このように、一歩引いてその関係性から出ることができれば、そのひとは、いっそう自身の見方や立場となっていく場所から、異なる他者を見ることが可能になる。これはLevinasの「第三者 the Third One」の概念を取り入れている。「第三者」とは、二者関係の解体を意味し、閉ざされた関係という理想主義的な観念を打ち破るための暗号、象徴である。この考えを基とする関係性の三者的理解は、ひとをパーソン・センタードに理解する上で重要となる。包括的な認識はもはや一対一の関係のみに注目することはできない。反対に、人間を常に、そして原初の時点から、グループの中の一人と理解することがその認識の基礎となっているのである。この文脈の中でひとであるとは、いくつかの重要な他者と関係していることを意味する。それは意図的承認と思いやりを持つことを意味する。自分と同じグループにいるその人間を先のように判断し評価する必要性の段階を経た後、成熟した方法でその他者の新たな謎に対して開かれ、そのひとを信じ、さらにそのひとの他者性に心を打たれることを意味しているのである。この「一致の時間」、それは、判断と「客観的な」立場を真にかつ意図的に控えること、そしてRogers (1986) が「プレゼンス」と呼んだものの関

係へと新たに参与することである。この段階では、本物であることはもはや、偶然の一致による、単純で純粋な自発的な状態ではなく、他者や他者らと向き合う、出会うための意図的な歩みである。

西洋哲学では本物であることについて、単一-多元問題と関連して永きに渡り議論されてきた。究極的には真実は一つなのか？ 単一とは核であり、目指すべきゴールなのか？ もしくは、多くの真実が存在するのか？ 多元、多様、多次元とは全ての基礎であり、求めるべきゴールなのか？ この問題には、ひとが本物であるとは、そのひとが自身の核心にいることなのか、もしくは、そのひとがその瞬間にいる関係の中に真にいることなのか、という問いが含まれている。パーソン・センタードな答えは、両方の立場が弁証法的な方法で、相互的な緊張のプロセスを生み出している、といえよう。本物とは単一も多元も含んだ、プロセスを指しているのである。

プレゼンス：心理身体的に「共にいること」と「相対すること」

本物であること、無条件の肯定的関心、共感と共に、ひとりの人間の態度、ひとつの根源的な在り方、関わることと実行することを構成している。Rogersが「プレゼンス」と呼んだ治療的關係における現象（例えばRogers, 1986）を詳しく検討すると、「プレゼンス」とは一致、無条件の肯定的関心、共感の態度の実存的な基礎であるといえる（Schmid, 1996, pp. 228-44; 1998a, p. 85）。人格主義的観点からみると、プレゼンスとは、Thorne (1985) やSteuri (1992) が主張するような、四つ目の中核条件などではなく、三つの態度を実存的な方法で包括的に描写しているのである。Rogersが、この三つの態度を使って記述したものは、より深い、対話的な、パーソナルなレベルで理解される、プレゼンスと一致している。Rogersは三条件を常にホリスティックに、「三位一体の変数」として本質

的に結合し合うものと捉えていた。それぞれの条件は、他の条件なくしては治療的意味を持たない。

弁証法的な意味で、プレゼンスとはHegelが、基本的態度の「アウフヘーベン」と呼んだものと見なすことができる。ドイツ語で「アウフヘーベン」とは、(1) 保存する、(2) 廃止、崩壊する、(3) 超越する、より高次元の意味を新たに与える、を意味する。もしこれらの意味をひとつのものとして同時に捉えるならば、「プレゼンス」とは、三つの態度の「アウフヘーベン」として理解することができる。三つの態度は保持されると同時に、超越されることで崩壊するのである。よって、出会いとは、「変数以上のもの」である。パーソン・センタードな関係性を理解し気づく上で、それぞれが単一であった三つの態度から、互いに根源的、実存的に十分に共にいる在り方へと超越することが不可欠である。よって、プレゼンスとは、Rogers (1986) が述べているような、意識の変化した、超越的な状態だけではなく、「出会いの中にいる」という在り方も意味している（Schmid 1996, p. 244; 1998a, p. 85）。プレゼンスとは瞬間瞬間の経験の流れと繋がっており、経験と象徴化との、また象徴化とコミュニケーションとの一致と差異を反映している。プレゼンスとは共感の現れであり、よって実存的な驚きの中で、それは他者が経験していることと繋がっている。さらに、プレゼンスとは自己受容、そして他者への、自身が瞬間瞬間に経験するいかなる感情へのパーソナルな承認として、肯定的関心を現している。これらの三つの態度の「アウフヘーベン」としてのプレゼンスは、出会いの条件として理解することができるといえよう。

プレゼンスとは、そのひとであること、つまり、十分に自身であり、十分に開かれて、そのひと個人として十分に生き、自身の中の関係を十分に生き、そして自分という関係を十分に生きることを意味している（私たちは関係の中にいるだけでなく、関係そのものなのである）。こ

こでの課題は、一度にそのひと自身でありかつ関係の中にあることである。つまり、感銘を受け、驚き、変化し、成長できると同時に、自身の経験と象徴化から離れずにいられる（他者の経験や解釈、立場を取り込むのではなく）、その経験と象徴化を基に価値付けることができる（他のひとを判断することなく）、自身の考え方を持ち続けられるということである。これが、存在している、の意味するものである。プレゼンスという共にいる在り方において、状態（being）と実行（acting）は完全に一致する。そのひととは自身の経験であり、そのひとは自身であることを行い、自身がすることがそのひととなる。そのひとが関わる人々に対して深い影響を与える、生きた一致である。

セラピー：クライアントの人生に対する当事者性の促進

ひととしてのその人、自立と相互依存、相互的な発露としての対話、出会いの弁証法的プロセスとしての当事者性、「共にいる」、また応答する能力としてのプレゼンス、これらの事柄は当事者性が持つ治療的影響を明らかにする。一致の促進的側面は、人間をひととして理解すること、その責任が土台となっている。ここでの責任とは、Rogers（1977）の、一致が一致を生み出すという言葉に由来する。当事者性は当事者性を促進する。なぜなら、当事者性とは実現傾向の発現、創造的な個性、真の関係性への努力に向かうよう、厳格さや防衛を解きほぐすからである。言い換えれば、パーソン・センタード・セラピー（以下、PCT）は、自身の人生の当事者に（再び）なっていくというCIの願いと欲求を促進するのである。

相互性なくして、当事者性も、他者に対するプレゼンスも存在しない。少なくとも、幾分かの開放性、気づきの力、他者から影響を受ける力が必要となる（Schmid, 2001c 参照）。PCTとは、出会いの関係の一種であり、それは、最初の時点ではある程度（ほとんど完全に）弱ま

った相互性と開放性から、十分な相互性へと向かうことを目指している。不平等な関係性における、例えばThの課題は相手の真の部分と関係している。本物であることと、自発性と創造性には深い結びつきがある。自発的な行動とは、人工的な行動、模倣、計画に沿った行動とは真逆である。また、これは自身を模倣することとも異なる。ある状況で役立ったことは、別の文脈では不適切に成り得る。よって、技術や方法の使い方に関する疑問が浮かび上がる。本物の自分らしく行動するとは常に、創造的で自身の内側から出てくる、つまり実現傾向の信頼によって導かれて行動することを意味している。

「私たちの視点 We-perspective」とその社会的次元

自身に対して真実であり、他者に対して開かれ、多次元の関係性において本物であること。それは、どんな関係性であっても「いつも同じである」ことを頑なに追求することでもなく、また関係性によって全く異なる在り方や行動をし、変化し続け、実体のない存在であるという考えに従うことでもないのである。セラピーに関して、これらの観点は一致における二つの主な誤解を指摘している。一つ目は「正直、または真実であればなんでもいい」という考えであり、これは関係の次元を無視している。関係性なくして一致はなく、また「一致それ自体」もない。二つ目の誤解は、「もし私があなたと共にいれば、私はあなたと完全に同一化され、あなたの言動は全て大丈夫だ」という立場である。これは、本質的次元を無視している（「あたかもas-if」の視点の欠落が生む共感への誤解；Schmid, 2001b 参照）。この点において本物であるとは、複数のひとと向き合うとき、例えばグループの中で、特に問題となる。前述したように、ひとは複数の関係性の中で、複数の「他者」と共に生きている。よって「私たちの視点」は真に、そして純粋に対話的視点なのである。

個人セラピーであっても、「第三者」（他者や

関係性、外界の比喩)は常に存在する。それは主題として、ひとや関係性として、セラピーの文脈として、または世界それ自体として話される。この「私たちの視点」は、グループの重要性を強調している。通常、人々はグループの中で生活していて、二人の関係というグループの特殊なケースも常に、他のグループの中に取り組まれている。そのグループとは生活の「いつもの場所」であり、人生の主要な場所である。人々は常に、家族、友人、職場といったグループに依存している。グループこそが本物であることを学ぶ場、本物であることが真に課題となる場であり、グループとは「最初の」治療的状況であるときえ言えるかもしれない。

人間を社会的存在として捉えることは、個人、グループ療法の適応の再評価に帰着する。社会的関係の中にいる人間という根源的な理解、また、矛盾への取り組みは矛盾を生み出す場所、つまりグループで行うのが一番であるという事実の認識から、次の問題が生まれる。つまり、いつグループが治療的な場所として選ばれるか、また、いつ個人的な治療関係が必要となるのか、ということである。このように考えると、個人セラピーは特別な保護が必要となるときのみ選ばれるべきである。PCAとは、深く社会的なものであり、よってグループ・アプローチなのである。

本物であることの政治的次元

本物であることの政治的意義は明らかだといえよう。グループとは社会の小さな一部であり、ひとと社会の共通領域である。本物であることは、連帯と自律への挑戦である。それは親密な関係やセラピーだけでなく、日常生活や社会、政治の中でも、本物でいられるかが課題となる。この真のひととなるという挑戦は、間違いなくその個人を超えたものである。「あなたは何者か?」、「私は何者か?」、これらの根源的な問いは、常にその場の状況(セラピーや協力関係、友人関係、グループ)を超越する。つまり、こ

れらは「今、この状況を超えて、私たちは何者か?」と問いかけているのである(Wood, 1988, p. 109 参照)。この問いは、Rogersが晩年に始めたアプローチに立ちはだかるパラダイムシフトを投げかけている。私たちがより社会的、政治的意味を理解すれば、PCAはアプローチ自体に対する課題により直面するだろう。もし倫理や根本的な人間像が重視されれば、PCAは真に社会的なアプローチへとさらに発展する必要があることは明白になるだろう。個人からひとへ、関係から出会いへの歩みは、我一人というパーソナル・センタードな関係の考えから、私たちの関係という考えへ変化し、社会的セラピーへと行き着く。よって、この我とは汝に対する応答として見出されるだけでなく、私たちにに対する応答としても見出されるのである。人間社会は、単一の個人的次元のみを強調するだけの見方や、「あなたの好きなように」、「何でもあり」といった偏った見方を克服しなければならない。これが達成されると、本物であることは、グローバル化された、混沌とした技術の世界で、ひととして生きる唯一の可能性になる。本物であることは阻害とは正反対である。本物であるひととは、本物になるために他者に挑む。なぜなら彼ら自身も他者を彼ら自身として真に受容するという挑戦をしているからである。Rogersがこのことを、セラピーやそれに近い関係における理論や実践のために記述したことは、彼の重大な功績である。これは、私たちが人生のすべての領域において、この本質を真に実践するための、今の私たちへの彼の遺産である。

3. 考察

1) Schmidの立場の特徴

Schmidは自身が行うThのトレーニングの方法を“Encounter-oriented learning programs”(Schmid 2015)と呼んでいるように、本論における彼のPCAの立場は、Encounter-orientedであり、ひととひと(達)との出会いのプロセ

スと捉えているといえる。Schmid の論考の注意すべき点は、彼はこの出会いの関係の結果として、自身への信頼や実現傾向の発現が起こることのみを述べているのではないことである。それだけでなく、ある関係に人がなることでその人は「ひと」となり、他者と出会うことを強調しているのである。

Schmid の論考の特徴の一つが弁証法的プロセスという概念である。彼は本論で PCA における、ひとのパラドキシカルな性質を描写している。ひとは自立的でありながら関係の中に存在している点で依存的であり、ひととひと（達）とが会うとは共にいることであり、相対していることである。プレゼンスの節で説明しているように、ひとは関わりの中で他者から深く影響を受けながらもそのひとであり続けている。これら相反する要素を、どちらか一方を選択するのではなく、どちらも保ち続ける緊張のプロセスを歩み続けることが、パーソン・センタードな出会いに繋がると論じている。さらに、彼の主張で特にこれまでの PCA では取り上げられてこなかった概念として他者性が挙げられる。他者を自身にとって理解し得ない、不可解な存在として捉える（捉えるということすらできなくなるかもしれない）視点はこれまでの PCA には見られなかっただろう。この他者性の観点から、Schmid は出会いとは相対することであると、共感によるコミュニケーションの意義を見出している。これは Th にとって大きな挑戦になるだろう。なぜなら、相手を根源的に異質であると見なし、その相手と関わるということは、自身の理解枠が無意味であり、相手の理解枠を分かることすら困難となり、さらにはその理解のできないなにかに自分が変えられる体験に直面するからである。そのような他者と相対するとき、つまり相手の（エニグマとしての）他者性が浮かび上がるプロセスの中で、Th はあらゆる外的な理論や方法に頼ることはできず、唯一信頼し、用いることが出来るのが、自分みずからなのである。

2) 個人内を超えたアプローチ：私たちの視点

本論は、PCA の射程範囲が、個人内、例えば心理的困難や個人がどう生きるかといったものに留まらず、グループやコミュニティ、社会自体にまで広がる可能性を指摘している。Schmid は PCA の社会的次元の意義として、個人セラピーで常に他者や社会という Cl や Th 以外の事柄が存在し扱われること、さらに、人は常にグループの中で存在し、そこで生じた問題はグループでこそ取り組めることから、グループの重要性を述べている。そして政治的次元でパーソン・センタードなアプローチとは何かを問いただすと、私たちはグループ（関係）の中だけでなく、私たちがグループという関係になることであるといえる。つまり、社会の中で個人がどう生きるかという社会の中の私における問題ではなく、社会である私たちがどう存在するか、私たちとは何かを問う営みに PCA は行き着くことを Schmid は主張していると読める。パーソン・センタードというひとを中心とするアプローチは、個人内のみ着目するのではない。ひとを関係そのものであると捉えると、人がひととなるということは関係、他者、そして社会そのものが変容することを意味している。Rogers が晩年に行っていた平和プロジェクトで目指していたのは、エンカウンターグループ自体ではなく、宗教間、文化間の対立にある人々が共にいる社会の構築であった (Kirschenbaum 2007)。人がひととして生きる社会を Schmid は見据えているが、その社会が醸成されるには、ある種の価値観や哲学を社会に広めるのではなく、実際にひととひとが出会うというアプローチによってのみ、達成し得ると彼は考えているのだろう。

3) いかに関わるか：パーソン・センタードな学び

本論は、ひととひと（達）との出会いの中で本物であることとは如何なるものかを詳細に論じている一方で、具体的に本物であることとはなにかは一切書かれていないといえる。自身の

経験と他者へのコミュニケーションとの一致、当事者性やプレゼンスといった箇所を読んでも、そのときの経験とはなにか、当事者としての自分とはなにかは全く述べられていない。本物であることとは、関係を通して起こり得るものであるという視点のみを論じているのである。そのため本論を読んだ後に、本物であることがいかに出会いにおいて重要であるかは理解できたが、ではその本物であることがなにかは結局わからないままであるという意見が出てくることがあるだろう。しかし、ここで読者に求められていることは、Schmid が本論で本物であることとは具体的に何を指しているのかを読み解くことではなく、この論文をパーソン・センタードな学びになる様に読むことであるといえる。つまり、読者が本論から得た視点をもって、実際の関係の中での自身の体験や他者を、いかに感じ取り、向き合っているのかを問い直し、深めることで、その読者はより本物になっていくといえよう。これは Worsley (2009) の現象学的な学びに通ずる。彼のいう学びとは個人の自発性と内省性をもって成立している。自発性とは体験に開かれることであり、こうなるに違いないといった既にある枠組みに当てはめるのではなく、自然に生じる体験をそのままに感じ取ることである。そしてそれを内省する、つまりなにを感じ取っているのかを感じ取る作業を通じて、単に感じ取った体験ではなく、自らにとって固有の意味をもった体験に深めるのである。本論は読者に対して非指示的であり、自身が本来体験していることや存在している関係に立ち返る、パーソン・センタードであることを呼びかけているといえよう。

文 献

- Buber, M. (1923). *Ich und Du*. Heidelberg: Lambert Schneider, 8th ed. 1974; orig. 1923.
- Buber, M. (1948). *Das Problem des Menschen*. Heidelberg: Lambert Schneider, 4th ed. 1982; orig. 1948.
- Buber, M. (1951). *Urdistanz und Beziehung: Beiträge zu einer philosophischen Anthropologie I*, Heidelberg: Lambert Schneider, 4ed. 1978; orig. 1951.
- Duden, K. (1963). *Etymologie: Herkunftswörterbuch der deutschen Sprache*. Mannheim: Dudenverlag, 7th ed.
- Kirschenbaum, H. (2007). *The life and work of Carl Rogers*. PCCS.
- Levinas, E. (1961). *Totalité et infini : Essai sur l'extériorité*, Den Haag: Nijhoff.
- Levinas, E. (1974). *Autrement qu'être ou au delà de l'essence*, Den Haag: Nijhoff.
- Levinas, E. (1983). *Die Spur des Anderen: Untersuchungen zur Phänomenologie und Sozialphilosophie*, Freiburg: Alber.
- Mearns, D., & Cooper, M. (2017). *Working at relational depth in counselling and psychotherapy*. Sage.
- Murphy, D., Cramer, D., & Joseph, S. (2012). Mutuality in person-centered therapy: A new agenda for research and practice, *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 11(2), 109-123.
- 小野真由子・斧原藍・並木崇浩・白崎愛里・山根倫也 (2021) 「出会い」の哲学から再考するパーソン・センタード・アプローチの共感的理解—Schmid の論文から学ぶⅡ—, 関西大学心理臨床センター紀要, 12 (印刷中).
- Proctor, G, Fuchs, R., & Przyborski, A. (2019). A core concept of PCA in the spotlight: facilitating encounter. *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 18(3), 195-201.
- Rogers, C. R. (1961). *On becoming a person: A therapist's view of psychotherapy*, Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers, C. R. (1977). *On personal power: Inner strength and its revolutionary impact*. New York: Delacorte.

- Rogers, C. R. (1986). A client-centered/person-centered approach to therapy. In Kutash, I. L. and Wolf, A. (Eds.), *Psychotherapist's casebook: Theory and technique in the practice of modern times*, 197-208, San Francisco: Jossey-Bass.
- Schmid, P. F. (1996). *Personzentrierte Gruppenpsychotherapie in der Praxis: Ein Handbuch. Vol. II: Die Kunst der Begegnung*, Paderborn: Junfermann.
- Schmid, P. F. (1998a). 'Face to face': The art of encounter. In Thorne, B. & Lambers, E. (Eds.), *Person-centred Therapy: A European perspective*. London: Sage, 74-90.
- Schmid, P. F. (1998b). 'On becoming a person-centred approach': A person-centred understanding of the person. In Thorne, B., and Lambers, E. (Eds.), *Person-centred Therapy: A European perspective*. London: Sage, 38-52.
- Schmid, P. F. (2001a). Authenticity: The person as his or her own author. Dialogical and ethical perspectives on therapy as an encounter relationship. And Beyond. In Wyatt, G. (Ed.), *Rogers' Therapeutic Conditions Evolution, Theory and Practice. Volume 1: Congruence*, 213-228, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Schmid, P. F. (2001b). Comprehension: The art of not knowing. Dialogical and ethical perspective on empathy as dialogue in personal and person-centered relationships. In Haugh, S. and Merry, T. (Eds.), *Rogers' Therapeutic Conditions, Vol. 2: Empathy*, 53-71 Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Schmid, P. F. (2001c). Presence: Im-media-te co-experiencing and co-responding. Phenomenological, dialogical and ethical perspectives on contact and perception in person-centred therapy and beyond. In Wyatt, G. and Sanders, P. (Eds.), *Rogers' Therapeutic Conditions, Vol. 4: Contact and perception*, 182-203, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Schmid, P. F. (2015). Encounter-oriented learning programs for person-centered psychotherapists: Some learnings from decades of experience and their theoretical background, *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 14(1), 100-114.
- 白崎愛里・並木崇浩・山根倫也・小野真由子(2021) 対話・他者との「出会い」の哲学から考える無条件の肯定的関心—Schmidの論文から学ぶⅢ—, 関西大学心理臨床センター紀要, 12 (印刷中).
- Steuri, H. (1992). Editorial. *Brennpunkt* 32, 2.
- Thorne, B. (1985). *The quality of tenderness*, Norwich: Norwich Centre Publications.
- Wood, J. K (1988). *Menschliches Dasein als Mit-einandersein: Gruppenarbeit nach personenzentrierten Ansätzen*, Köln: Edition Humanistische Psychologie; American orig.: manuscript.
- Worsley, R. (2009). *Process work in person-centred therapy*, Macmillan International Higher Education.
- 山根倫也・小野真由子・並木崇浩・白崎愛里(2021) パーソン・センタード・アプローチにおける「出会いの関係」から考えるプレゼンス—Schmidの論文から学ぶⅣ—, 関西大学心理臨床センター紀要, 12 (印刷中).